

いろいろという
ご



なほ

この本は

この本は、主に、ツイッターで書いているツイノベ、#twnovelをまとめたもの、NO5です。

一冊目 <http://p.booklog.jp/book/36687>

二冊目 <http://p.booklog.jp/book/47555>

三冊目 <http://p.booklog.jp/book/49689>

四冊目 <http://p.booklog.jp/book/51371>

ひつじ雲

ひつじ雲が群れている。

ふわふわ群れたら青空曇って、太陽どこかに消えてった。

今日は洗濯日和のはずが、これじゃあ何にも乾かない。

私はルルルと電話をかける。

「ちょっと話が違うじゃない？」

天気予報士威信をかけて、空へ犬雲解き放つ。

ひつじ雲達一網打尽。今日も予報は守られた。

[#twnovel](#)

雨宿り

雨宿り3日目。

軒下から眺め続ける雨が檻のようで、囚われる喜びを見いだした僕はもうここにいる目的など忘れていた。

美しい雨。もっと、もっと。

[#twnovel](#)

「てるてる坊主したって無駄だろ」

「だって週末晴れたらデートしてくれるって...」

「ねーちゃんそれ遠回しに断られてんだよ。梅雨だし」

花火

恐いくらい真剣な顔で花火を見上げる君。

「たまや〜」屋号を叫ぶとか渋い。

「かずや〜」それは屋号では。

「なおや〜」震える声。君の頬に光る涙。

「花火は 弔いの意味もあるのよね？」

頷く。

「昔の恋を成仏させたい」

そうだね僕も願ってる。次の僕との恋のため。

花火がまた、あがる。

[#twnovel](#)

恋心

大丈夫。声がする。

告白できず躊躇う私を後押しする。

だって前に恋した時は酸っぱくて苦くて。

やれやれ。ぬっと鼻の穴から出てくる老婆。

前はおんた漬かりきらない恋心無理矢理食べたから。今はもう頃合だよ。

彼女は漬け物婆ちゃん。感情を熟成させる達人。

妙なる恋を召し上がれ。

[#twnovel](#)

花子

「トイレでご飯が流行りなの？」

背後からの声に驚く。

「私、花子」

トイレの花子さんが現れた。

便所飯を説明すると難しい顔をして「出てく時悲鳴あげてね」と言った。

[#twnovel](#)

きゃー。どうしたの？

同級生に囲まれる。

花子さんの事を話すと友達ができた。

お礼したいのに花子さんに会えない。

漬け物婆ちゃん

漬け物婆ちゃんは感情を漬けこむ。

この子は最近悲しみばかり。

ツボ一杯にたまった悲しみ、しょっぱい涙で和えて重石を載せて待つ。

来たるべき日がやってきたなら、漬け物婆ちゃん重石を外す。

胸がすっと軽くなったならそれが食べ頃。

時が癒した悲しみが、美味しい糧に変わる時。

[#twnovel](#)

砂の城

貴方と私で築いた砂のお城。

君はお城のお姫様。大きくなったら本当のお城を作ってあげる。

幼い貴方とお城に作ったトンネルの中で指切りげんまん。

[#書き出し](#)

「ここどう?」「いい家ね」

あら、壁におかしな穴。覗くと貴方が「指切りしよう」。

結ぶ小指。

「結婚して下さい」

狡い。こんなの断れない。

雨の理由

この季節、雨が続くのは宇宙の読書月間と重なるからです。
降り方がまちまちなのは淹れる宇宙人の好みがちまちだからです。
意味が解らない？ですよ。
実は雨を地表に落とし、宇宙人は珈琲を入れているのです。
読書には珈琲。
地球の中心は珈琲です。
は？マグマ？見た事あるんですか？

[#twnovel](#)

宇宙人の卵

この季節は長雨に紛れ、宇宙人の卵も降ってくる。

はい、俺様来襲。

近づく地面。固そう。割れる。偶然通る、自転車女子。俺は、落下する。

[#twnovel](#)

そこすら死地と知っていた。

でも俺、ただでは死にたくなくて。

割れた俺、シャツを濡らす。

命を賭けた透けブラ。

これ、が、俺の生きた...証.....

活字料理

活字料理始めました。

図書館に見慣れぬ文字列。

頼んでみると、テーマは？と問われる。それじゃ恋愛。

司書が本棚から取り出した本の中身は白紙だった。

「君みたいな人を探してた」突然の告白。驚く私。

台詞と行動が白紙を埋めていく。私の答えも記される。

新鮮な活字を召し上げられ。

[#twnovel](#)

便所飯（改）

便所飯は寂しい。

そこで生まれた「トイレの友達」は流行した。

花子さんや貞子さんを召喚できるシステムだ。

昼時のトイレは人で溢れた。

自分の霊と昼食を楽しむ。

みんな一緒に楽しめるようにと大部屋トイレも作られた。

賑わうトイレ。

そのためぼっちは教室で、1人優雅に食事する。

[#twnovel](#)

花火大会

花火があがる。

照らされた君の笑顔。

暗闇。

花火があがる。

藍の袖。隠れた君の手を握る。

暗闇。

震える指先。君は気づいてる。

花火があがる。

紅潮する頬は花火のせいじゃないよね。

次の暗闇で、きっと僕らキスをする。

けれど空にはスターマイン乱れうち。

僕ら、空を見上げて暗闇を待つ。

[#twnovel](#)

夏の庭

庭で子供達が遊んでいる。

あは見覚えのない子。なんだか少し透けてるみたい。

お盆も近いしそういうこともあるわよね。

いいわ一緒に遊びなさい。

けれども一つ、覚えておいて。

変な気おこして、うちの子連れていこうとしたら、

私がすぐあなたをあの世に連れて帰ってしまうわよ？

[#twnovel](#) [#百](#)

探し人

気配がする。

ドアを開けると、傘をさした女の子が笑う。

探してるの？探してる。後悔するよ？そうかもね。でも求めるの？欲しいんだ。

そう、それじゃあ。

[#twnovel](#)

傘を投げ捨てた女の子。

雨が上がり、照りつける太陽の牢獄。

眩暈しそうな蝉の声。

僕は停止しそうな思考の端で感じる。

夏が来た。

シロ

男が送り狼に変身したがる私は家の前で言う。

「シロお帰り」「シロ?」「うちの猫」

シロがよく座ってた室外機を指さす。大抵の男は帰ってくれた。

[#twnovel](#)

「可愛い」彼はそう言ってなでる素振り。

「黒いのにシロなんだね」

にゃあ。

「シロ!」

私は狼を、部屋へ招く。

[#twCATnovel](#)

七夕

俺ら、川のあっちとこっちに離される。
二人を認めるわけにはいかん？
ふざけるな。
そんなことで引き裂かれる俺らじゃねえ。
急流天の河。鍛えあげた肉体で俺は渡る。
速い。流されそうな俺に、愛しいお前が手を伸ばす。

「ふぁいとー」「いっば一つ」
絡み合う、黒い二つの力こぶ。

#twblnovel

「短冊何書いた？」
俺は短冊を隠す。
「隠すとか酷いな」
運動神経だけはいいいアイツに奪われた。
「××高校合格って俺と一緒に？でも中島なら余裕だな」
そうだよ磯野、問題はお前だ。
俺のこれは、ランク上げろと言う大人達へ抵抗だ。

「頑張ろうな」「お前がな」
一緒なら、頑張れる。

#twblnovel

VSパンダ

だいたい同じだと思うんだ。

黒と白。丸いフォルム。食べちゃいたいくらい可愛い系。

なのになんだ。

あいつはVIPで俺は、俺は。

動かないってそんなに萌え度を減らすのか？

ならばわかった。

パンダに負けない俺になる。

[#twnovel](#)

「ちょ、転がった」「あーん、鮭おにぎりがっ」

萌えろ。萌えろ。

流れる

年に一度しか会えない恋人。

なのに今年は台風で会えない。

貴方のツイッターを眺めてた。

最近同じ名前の女の子とよく話をしているね。

相談にのってあげてるのが貴方らしいけど、その子はきっと、貴方が好きよ。

決して入り込めない温かな言葉の緩やかな流れが、

天の川以上に私を阻む。

[#twnovel](#)

逢瀬

「元気で」「貴方も」年に一度の逢瀬も今年で何度目か。
あの人も私も今ではそれぞれ結婚し、家族と共に暮らしてる。
う合わないとは言い出せないまま気づけばこんなに年をとる。

[#twnovel](#)

今年も7月7日。

橋の向こうから来たのは少年。

「父は死にました」

私の長い恋は終わった。

一年一度

「一年に一度しか逢えないなんて」
そう思ってた時代が私にもありました。
今にして思えばあれは神様の粋な計らい。

「今日パパくる日？」
娘に言われてようやく気付く。忘れてた。今日約束あったのにな。
仕方なく彼の好きなカレーを作る。
多分、年に一度だから続いてる私達は結構幸せだ。

[#twnovel](#)

ガタンゴトン

線路に耳をあてると、電車の音がする。

ガタンゴトン。安心した。この二つの冷たい路は、必ず誰かに繋がっている。

世界はまだ、生きてる。

ここに誰もいないなら、歩けばいい。迎ればいい。

ゴールがあるってわかっているれば、二本の足は動くでしょ？

「ガタンゴトン。次は...」

[#twnovel](#)

もうそう

孟宗竹は妄想する。

いつかきっと天まで届く。

もうそうが育つ。もうそうで育つ。風に吹かれて揺れるもうそう。たくましいもうそうすくすく育つ。

天を突き抜けやがて月へと辿り着く。

[#twnovel](#)

ふと気がついた孟宗竹は未だ竹の子。

妄想する。

大人になった自分を。妄想する。いつかきっと天まで。

飛ばない羊

毎日うっかり羊を数えてはやくに眠ってしまうので、羊という羊を処分した。

そしたら代わりに山羊がきた。山羊も処分したらウサギが犬が小鳥がきた。

次々代わりはやってくる。

困った僕は、柵を飛ばない動物を、あらかじめ飼うことに決めた。

[#twnovel](#)

柵の前で眠る猫。それでもやっぱり眠る僕。

透明人間

クラスみんなは僕が見えない。

目があたって知らんぷり。机には花を飾られた。

透明人間型いじめられっ子の僕。

たった1人の友人は、近寄ると逃げられるバイ菌型いじめられっ子の彼女だけだ。

「でも透明人間扱いよりいいなあ」

「そう？じゃ頑張れば？幽霊は訓練次第で実体化可能よ」

[#twnovel](#)

演出家

「わかんねーなら人生辞めちまえ」

「お望み通り辞めてやる」

僕と人生の演出家は決裂した。

[#twnovel](#)

その夜、泥酔して帰ってきた演出家。

「ついうるさく言っちゃてさ。でもアイツ本当は凄いんだ。いい人生になるはずなのに…」

転がって繰り返す。

誰に言ってんだよ。

僕は薄い毛布を彼に掛けた。

どん

「そろそろハッキリさせたい」

真剣な眼差し。

「お前は何を親、何を子として親子丼を作るのか」

鶏卵どっちが先戦争は激しさを増していた。

返答次第で当店親子丼の未来が決まる。

[#twnovel](#)

「親子じゃないよな。愛し合っ」

「言うな」

翌日、鶏と卵は駆け落ちした。

うちの親子丼には親も子もない。

しっぽ

尻尾をふった。

ちぎれるくらいにぶんぶんふった。

ちぎれた。

尻尾は気づかず天高く飛んでいく。

呆然と見送るご主人様と僕。

どうしよう。

僕にはもうふるものがない。

しょぼくれる僕の尻尾跡地を撫でるご主人様。

まるで愛の印みたい。

尻尾跡地はハート型。

僕は、ない尻尾をぶんぶんふる。

[#twnovel](#)

屋敷

隣の屋敷には美女が住んでる。

木々に覆われた一人で住むには大きすぎる屋敷に彼女は猫達と住んでいる。

猫屋敷の美女。彼女は僕の憧れだ。

[#twCATnovel](#)

「今日は俺の番にゃ」「化けるの大変にゃ」「人住んでないと壊されるのにゃ」

一枚の写真を手本に当番制で美女に化け、猫達は屋敷を守る。

あおいとり

あなたはマウスに手を置いた。

12件の新しいツイート。クリックする。

流れてくTLを無表情で追うあなた。

次に新しいタブで [#twnovel](#) を検索する。

大好きな作家の作品を見つけると暫し動きを止め、ニッと笑いお気に入りに登録。

私、あなたのことなんでも知ってる。

目の前の青い小鳥が囁る。

納豆

両親が喧嘩している。

姉貴に聞いたら、夕食が納豆のせいだって。

そりゃ父さん怒るって。

「おかしいだろなんで粉チーズがない」

「合わないわよ」

「発酵+発酵=感動だろうが」

「やっぱ卵が最高よね」

食卓には母親セレクトの混ぜものが並ぶ。

喧嘩の原因そこ？

わが家は今日も平和です。

[#twnovel](#)

お茶

職場に居場所がない。

結婚で入れかわる後輩達。出産で辞める同僚達。

いやらしい肩たたきの日々。

この部屋の扉を叩く時が来た。

[#twnovel](#)

来ると思ってたわとお局様。

お茶くみOLのスキル向上の場、お茶道部。

「美味しいお茶を淹れる為にまずは環境作りよ」

翌日、肩たたき上司は退職していた。

ぱんだこぱんだ

はやすぎたんだ。

子パンダの亡骸を前に母パンダは思う。

未熟な姿での誕生はパンダの宿命。

打ち勝つためにはどうすれば。

[#twnovel](#)

最近母パンダが可愛いと評判だ。

笑顔の裏で彼女は思う。

地球を手に入れ文明を奪い子供の命を守るのよ。

色仕掛けから始めましょ。

汚れてもいい。私の前に跪いて。

ついでと

放った魚は川の中。

流れにのり、逆らい、従がい、止まり、流される。

交わり合う川、孤高の川、広い川、狭い川、枯れた川。

跳ねる魚、群れる魚、迷う魚、育つ魚、進化する魚。

川岸の木々の梢に住まう、魚を狙う青い鳥。

ついでと飛んで啄むと、

残さず全てを喰いました。

[#twnovel](#)

どっち

「だいたい同じようなもんなのにこれを別人と見分けるなんてなー。ま、お前が機械って証拠だな」

「親方、だいたい同じって言うけど、合ってるの目と鼻と口の数だけで性別まで違います。だから機械は困るんだ」

機械はお前だと睨み合う師弟。

溜息ついて私は両方の電源をそっと切った。

[#twnovel](#)

トンボの眼鏡

眼鏡屋は今は繁忙期。

トンボの眼鏡が飛ぶように売れる。

最近はトンボもお洒落になって、流行にとっても敏感だ。

今年のトレンドはハードボイルド。

濃いサングラスが大ブーム。

眼鏡は変身願望の表れ。それはトンボも同じこと。

黒ずくめトンボの突然の暗殺には十分にお気を付け下さい。

[#twnovel](#)

センチメンタルマウス

壊れたマウスは暴走する。

そこはクリックしたくない。拒んで逃げて、なのに無理矢理ダブルクリック。

マウスの心は傷ついた。なんて陵辱。

センチメンタルマウスは旅にでる。

各地でマウスがクリックすると、デスクトップの地図に現位置が記される。

今、青森か。雪降る前に帰ってこいよ。

[#twnovel](#)

キス

好き。だからキスしてあげる。

眠ってる貴方に残す私の愛の印。

貴方が私を嫌いなことは知ってる。

私が誰か分からないように、けれど余韻は残るように、あとが残るくらいの激しいキス。

そうして私は消えていく。

[#twnovel](#)

唇に残る感触。手を当てる。痛み？

鏡をみると腫れていた。

蚊め。ブーン。

世界

最近、世界は壊されてばかり。

神は嘆く。

世界の数は決まっていて、壊されたなら作らねばならない。

作るのはとても大変だ。

困った神は「世界を壊したら必ず作る。作ったら必ず壊す」法を作った。

嫌がる地球人。面倒くさい。神様は手っ取り早く、地球の消去ボタンに手をかける。

[#twnovel](#)

花火

歓声が上がる。花火の下、今までの闇が嘘のように人々の笑顔。

みんな一緒に花火を見上げる。

こんな風に同じ方向を向く事が出来たなら彼らは滅びずに済んだのに。

宇宙人は花火を投下する。

花火は死者の霊を慰める。

嘗ての幻を映された地球は、やがて再び闇へ還る。

[#twnovel](#) [#twnvday](#)

花火が美しいので、空に花火が常設された。

星の瞬きも月の光も全てを消して。

太陽の輝きとも張りあって。永遠の花火。

人は、花火を見なくなった。人は空を見なくなった。

見ない空などいない空だ。空は黒幕で覆われる。

一体これで何度目だ。

どこまでも低くなる空。

[#twnovel](#) [#twnvday](#)

花火大会は生憎の雨。

人で埋め尽くされるはずの河川敷には僕ら二人きり。

傘をさしてさ、空を見上げる。

残念だね。君は言う。

あがらない花火。

残念かな。僕は言う。

[#twnvday](#)

本当は僕ら、二人きりなんかなれなかった。

本当は僕ら、相合傘なんてさ。

手と手が触れる。

花火が、あがった気がした。

女

「待ってた」物静かなこいつとは夜しか会わない。
太陽の下で会いたいのは「どこいったの！」元気なこいつ。
女は簡単だが面倒だ。
すり寄ってぺろっと唇を舐めれば簡単に餌をくれるがすぐに束縛したがる。
都合良く使わないとな。
俺にはあと7人女がいる。モテ猫は忙しいにゃ。

[#twCATnovel](#)

ブンメイ

迷い込んだビル群。

ここには昔ブンメイがあった。

枯れ果てたビルの根、かき分けて走る。

跳ねる水。空飛ぶ鳥も僕らもみんな、海へと還る支度する。

この地が海へと還ったならば、ビルの谷間、大きな魚が泳ぐだろう。

滅びたブンメイが見る夢の中、僕は走る。

決して捕まらないように。

[#twnovel](#)

巣

うちはいい働き蜂がたくさんいるの。

うちの方が稼ぎは上よね。

あら、未来のために役立ってるのはうちよ。

[#twnovel](#)

朝、沢山の蜂たちが巣に戻る。蜜を造り使って蓄え、夜になると去っていく。

蜂の巣たるビル群は「我が社」の自慢に花を咲かせる。

そして毎朝、蜂を迎える。

今日も1日頑張る。

かえる

かえるかえる。

蛙はかえる。進化の道を、ひきかえる。

かえるぴょこぴょこ海の前。

かえるかえると願い続けてようやく魚へかえる、かえる。

未来のすべてと、とりかえる。

むかえるは過去へとただかえる。

みかえることなく海の底、

かえるかえるよ、おかえるなさい。

[#twnovel](#) [#twpoem](#)

行列のできる

もう8時間も並んでます。

そう言ったら、あら私は40年よ。俺は60年だ。と言われた。

みんな並びすぎだと思う。

一体どんなアトラクションか。

行列を先頭まで辿ってみると「年金」と書いてあった。

係員がヒソヒソ話をしている。

「入場制限を」「後ろの方もうダメそう」

デスヨネー。

[#twnovel](#)

虫除ける

「一番よく効く虫除け下さい」「こちらです」

[#twnovel](#)

「これ効かなかったわ。かゆみ止め頂戴」

「こちら、蚊には効きません」

「は？」

「悪い虫にはよく効くんです。変な男からの誘い減ってませんか？」

「男...」

「美人だからお困りかと」

「そ、そうねよく効くわ」

「皆さんそうおっしゃいます」

スマホ

最近の若者は隣にいたってスマホ画面で会話する。

沈黙の会話。けしからん。

人はその機能を十分に活かすべきだ。

声を自ら封じるなんて。

[#twnovel](#)

音楽のように会話が聞こえる。

スマホの体を手に入れた人々は、人型スマホに指令を出す。

道具になった人体は限界まで性能を引き出せる。

便利。

海

海水の作り方。

①雨を集める②涙を集める③混ぜる④隠し味...隠し味とは何かしら？

姫は問う。それは自分で探すのよ。できなきゃわだつみにはなれないの。母に言われ悩む姫。

コップの中には未完の海。溜息ついて試行錯誤。

できず落ち込み、最後は、海のバカヤロー。

[#twnovel](#)

翌日海は完成する。

青空市場

青空市場が時代と共に姿を消している。

このご時世だ仕方ない。そういう祖母は寂しそう。

代々市場で店をだしていた祖母を母は継がなかった。

私の代で終わりだね。

祖母の店が好きだった。

私がやる。

あんたが？青空を売るのは大変だよ。綺麗な青空を捕まえるのが最近とても難しいんだ。

[#twnovel](#)

真夏

朝起きると隣に真夏が寝ていた。

「昨夜のこと忘れない」寝苦しい夜だった。

君は恥じらいながらエプロンをする。

ご飯作るね。初々しい新妻のようだ。

けれど僕は知っている。

やがて激しい猛暑となつては攻め、さらに残暑となつては翯る君を。

真夏の口付け、蝉の声。

本気の夏が、始まる。

[#twnovel](#)

掃除するゾウ

掃除機をかけようとしたら、象だった。

綺麗にしてくれと頼んでみたら、象はわかったと勢いよく息を吸い込み、鼻から一気に吐き出した。

塵や埃を、家を、僕を、街を、文明を、世界を全て吹き飛ばし、足元を失った象は落下する。

そしてまた、誰かの掃除機のふりで静かにその時を待つ。

[#twnovel](#)

みんな

蝉の営業時間が短縮された。

節電や不景気の影響らしいが、蝉の事など解らない。

不都合はなかろう、と誰も否やを唱えなかった。

今年は暑苦しさ半減だ。

[#twnovel](#)

割れるような音。密度を増した蝉の声。

仕事の時間が減っても量は減らないのは人と同じらしいが、蝉の事など解らない。

暑苦しい。

遊び

そうか遊びといじめは違うのか。

遊びだと罪に問われないのか。

そうか。じゃ、もしかして、俺の場合も？もしかして罪ではない？

なんだ、悩んで損したよ。それなら思い切って伝えてみよう。

「君とは遊びだった。ただの遊びでやった。悪気はなかった。」

さあ許せ。頼に平手。デスヨネー。

[#twnovel](#)

虫

「えーん、虫くっつけられたー」

「相手は男か」

「うん」

「許せん、親を呼べ」

「相手は子供なんだしそんなに怒らなくても」

「虫だぞ？男にとってそれは宝。ヤツがどんな醜い欲望を娘に抱いてるかと思うとあぁっ。
そんな汚れた想いは俺が断ち切ってやる」

「あなたがそうだったのね...」

[#twnovel](#)。

活字中毒

僕は本を愛している。

活字に囲まれて暮らしたい。

[#twnovel](#)

目覚めると、僕のまわりは活字だった。

椅子は、「椅」と「子」が大量に集まり形を作っている。

他のものも全てその調子だ。

僕の願いは叶ったのだ。

嬉しさにガッツポーズをする僕の握り拳は、

「活」「字」「中」「毒」で出来ていた。

お誕生日

生まれたての貴方は小さくて、立てるかどうかも不安だった。

立ってからは歩けるか、歩いてからは走れるか。

不安に不安を重ねて行って今じゃここまで大きくなった。

沢山の喜びと少しの怒り、時に哀しみんかを抱え、みんなを楽しませてくれる。

[#twnovel](#) 有り難う。君が生まれて僕は幸せ。

いろとせかい

長雨に色を失う世界に彼らは色を塗る。

一年経って剥がれた色を雨に隠れて塗り直す。

木々も街も恋心も。

やがて梅雨明け光がさすと世界のピントがずっと合う。

蘇る世界。

「俺ら綺麗にしかできねえ」

ペンキ屋が僕の背中を押した。

そうだねまずは届けなきゃ。

僕は君のドアを叩く。

[#twnovel](#)

蠟燭の炎

お誕生日おめでとう。
大きな苺ケーキに蠟燭をたてる。
火を灯したなら電気を消そう。
暗闇の中に浮かびあがる君の笑顔。
ありがとう。
君の祝福が一番の贈り物だ。
蠟燭の世界は秘密めいて、なんだか僕らを親密にさせる。
消したくない。でも。

[#twnovel](#)

吹き消した炎。
電気をつけると君はいない。

金魚

ママがいない、と少女は泣いた。
金魚水槽のこちら側。僕は少女を座らせる。
ひらひら兵児帯。
おじさん知らない？
僕に尋ねる潤んだ眼。横に首を振ったなら、
少女はじっと水面を見つめてぽつり、
かえる、
と呟いた。

[#twnovel](#)

ちゃぼん。
残されたのは赤い帯。
少女が消え、水槽の金魚が一匹増えた。

ついのべ

[#twnovel](#) には、loveがある。[#twnvday](#)

自動販売機

自動販売機を始めた。
百円投入される。カーテンが開く。
居間で繰り広げられる僕らの日常を外からご覧頂く。
お客は意外に多かった。
常連もいる。
ホームレスが有り金をはたいて涙することもある。
今日も販売中のランプを灯す。
僕は、自分が売っている物の正体が、未だよく解らずにいる。

[#twnovel](#)

百円入れるとカーテンが開く。
家の中で繰り広げられる家族の日常を自販機で買うのだ。
今日は先客がいる。
「ジョウレンさん！」
この家の子。
「どうした」
「パパもママもカーテン開けば笑ってるから」
舞台裏は大変らしい。
「戻りな。金入れるぞ」

[#twnovel](#)

居間で笑う三人。
俺は有り金をはたく。

ことりうた

小鳥は優しい歌を歌う。

チチチ。

そんなに夢見がちでは僕らの心を癒せない。

小鳥は悲しい歌を歌う。

チチチ。

そんなに現実的では僕らの心を慰めない。

小鳥は愛を憎しみを喜びを孤独を。

チチチ。

歌えども、人の心には届かなくて。

小鳥は彼方へ飛びたった。

歌を殺したのはどなたでしょう。

[#twnovel](#)

ネバーランドGOGO

青いリボンをほどいてもう何年経つだろう。
彼は私を迎えにこない。ネバーランドは遠いのね。
溜息つくと、月の方から声がした。
「迎えに来たぞ」相
変わらず 少年の姿。
「ちょっと行く前に質問があるの」
「何？」
「今の仕事は？」
「俺様の仕事は俺様だ」
私は窓を閉めた。初恋よさよなら。

[#twonovel](#)

かくれんぼ

かくれんぼ好きなお前は今日も隠れてる。
隠れる理由と鬼が欲しくて犯罪を繰り返すお前。
今日は一体どの空の下。

[#twnovel](#)

見つかったとの連絡。出迎えた俺を見つけて舌を出すお前。
いつも一緒にかくれんぼしてた。そして今も。
俺はお前の鬼になるべく警察になった。
これで記念すべき10連勝。

かき氷

はじめてみた。白いふわふわ。これは何？
羊？羊だったら追いかけてたい。けど逃げない。
毛玉？毛玉だったらほどこきたい。けど転がらない。
何？これは何？
分からないなら、この可愛い赤い舌でぺろり。

[#twnovel](#)

「にゃーっ」「タマ！かき氷はやめときなさい」
キーン。

[#twCATnovel](#)

責任問題

失敗に対しトップは責任を負うものです。

謝罪し原因を明らかにし被害者に補償する。

組織は潰れるかもしれません。改善を求められるかもしれません。

それに真摯に応える。何故貴方はそうなされないのですか？

[#twnovel](#)

はいはいわかりましたよ。

ふて腐れた神様は、地球を乱暴にゴミ箱へ捨てた。

壁画

風呂の壁画描きを生業としている。

得意は富士、それから小鳥。

僕の絵には必ず小鳥が飛んでいる。

小鳥は湯を浴び僕へと帰る。

「私のお風呂は」「うちなんか」

部屋に描いた木々の梢で繰り返されるお湯自慢。

けれども僕は知っている。

うちに帰らぬ小鳥のお湯が、何より素敵なお湯だって。

[#twnovel](#)

頂

かき氷のスプーンに小さな山男が飛び乗った。

ピンクの頂から冰山を一気に滑り降り、次なる山を見つけ喜ぶ。

しかし僕はかき氷が食べたいのだ。

氷と男を口へと放る。

おいしい。冷たい。ああ、こめかみが。キーン。

[#twnovel](#)

ザイルに身を預け登る度、山は唸るが気にしない。新たなる頂を目指せ。

しゅうまつ

しゅうまつは妻と一緒に旅行する。
モニターの上に地図を開いて、マウスでスッと道を辿る。
映し出される美しい景色。
僕らの過ごした愛しい世界は、データとしてしか残らない。
存在しない世界をなぞり、あたかも今でもあるかのように。
週末は妻と一緒に。終末は妻と一緒に。

[#twnovel](#)

視聴者参加型

視聴者参加型番組が増え、その流れはドラマへも広がる。
視聴者の「結末投票」でラストが決まるのだ。

[#twnovel](#)

「もしも毎度お決まりのラスト飽きたわ」

「投票制ですので責任は負いかねます」

「無責任」

「この電話は生放送に連動しております。」

視聴者様が返答投票されますまでお待ち下さい」

丑の日

「丑の日だしうのつくもの食べないと」
「うどんでしょ」
「何でわかったの？あ、もしかして僕の事好...」
「あんた香川県民だもん」
「うん」
「だからうどんに決まってる」
「確かに」
「香川っていい所？」
「いい所だよ」
「こ、今度連れてってよね」
「うどん好きなんだね」
「ばっかっ！」

[#twnovel](#)

羽化

離婚離婚と五月蠅い妻が静かになったと思ったらサナギになっていた。

妻はやがて羽化する。

若返った妻は濡れて美しい。

長い暗闇を抜けて羽ばたく時が来たのって、俺との生活は土の中か。

残りの短い人生を謳歌したいの。

そんなに綺麗に笑われては仕方ない。

俺は離婚届けに印を押した。

[#twnovel](#)

蝉の声

蝉の声がうるさい。

あまりにも酷いので診て貰うと、耳の奥に蝉がいると言う。

蝉が死んだら取り出しましょう、そう言われた。

蝉の声は日々大きくなる。

羽音が聞こえる。

そしてある日唐突に静かになった。

僕の中、命を繋ぐこともなく死んだ蝉を思い、耳の奥の墓場にそっと手を合わせる。

[#twnovel](#)

魔王党

我は魔王。我が世界を支配しよう。

とはいえ野蛮は好まない。

清潔第一、綺麗好き。カビや埃は大嫌い。

支配するなら明るい社会。仲良く穏和に暮らしたい。

ということはだ。

[#twnovel](#)

「魔王党を宜しくお願い致します」

我は国のトップに立った。

行き詰まったこの国を変えてみせる。

西の海

焼魚、おいしかった。

あれが食べたい。

けれどもヒトは気紛れでしかくれなくて。

猫は夕陽の海をみる。

そういえば太陽、毎日あちらにとけていく。

もういくつも。

あちらの海はどれだけ熱いことだろう。

そんな海の魚達は。きっとそう、焼けてる。

猫は海に飛び込んだ。引き返す。

西は遠い。

[#twnovel](#)

おことわり

「お客さん刺青お断りだよ」

俺の腕に住まう龍神を見つけると、番台のおばちゃんは言った。

「実はこれ刺青じゃないんだ」

「何言ってんだ刺青だろ」

俺は腕を掲げる。

「出でよ闇の眷属、翔べ漆黒の翼！」

ゴゴゴ。

俺の腕に描かれた龍神は腕を抜け現実に姿をとった。

「ペットもお断りだよ」

[#twnovel](#)

本読み

凄くいい装丁。

題名もいいし私好みの予感。ちょっと覗いて...あー見かけ倒しのナンチャッテ文芸か。

彼女は本を棚に戻した。

[#twnovel](#)

凄く可愛い。

眼鏡っ娘だし俺好みの予感。ちょっと覗いて...あー見かけ倒しのナンチャッテ文学少女か。

本は自分に触れた相手を読む。

本物の本好きを、待ってる。

オリンピックロンドン

かき氷屋は軒並み品切れ。

残っていたのはブルーハワイかオリンピックロンドン。

僕はロンドンを選んだ。

[#twnovel](#)

白い氷に五色のシロップ。

あ、審判にスプーンを止められた。

今のは技にならないらしい。ていうか技って、とっていたら判定覆り俺金メダル。

さてと。残りはどう食べ進めようか。

パンツはいてない

まずはパンツをはく。全てはそこからだ。

この言葉はアダムとイブの前に現れた第三の人類が発したと言われています。

パンツをはいた二人は隠して初めて恥じらいを知るのです。

そのことからこの言葉には

「全部だせばいいってもんじゃない」

という意味があります。

はい、ここテストでますよ。

#書き出し

魚

第一志望の欄に魚の絵を描いた。

先生は渋い顔。

「君の気持ちは解る。先生もいい職業だと思う。稼ぎも良さそうだし魚好きなら一度は憧れるだろう。

だけど難しいぞ？彼は人と魚を結ぶ唯一の架け橋だ」

「先生、僕さかなクンになりたいわけじゃ」

「貴様！さんをつけろ、さんを！」

先生が怖い。

[#書き出し](#)

フラグクラッシャー

先輩はプロのフラグクラッシャー。
専門は死亡フラグだ。
今回挑戦するフラグは最高難易度。
そう、「この戦いが終わったら結婚しよう」。
戦地に赴く先輩。
銃弾を避け、爆発寸前に脱出。
さすがの見事な生還。愛する人の元へと帰る。
「また逃げられた」
13回目の失敗。先輩は女を見る目がない。
#書き出し

バイト

世界を救うのが忙しいんで今日のバイト休ませて下さい。

それ何するの？

仲間作って敵倒して装備揃えて強くなってボスを打ち倒します。

このバイトと一緒にじゃん。

水商売と？

うん。派閥作って好敵手蹴落として露出 アップして魅力アップしてNO1。

同じことならこっちにします。

うんそうしな。

[#書き出し](#)

夕日

夕日は悲しい気がするじゃん。だから好きじゃないな。

綺麗だけど闇を連れてくるから朝日の方が好き。

そう言う貴方の彼女はいつも艶っぽい夕日のような美人よね。

嘘つきな貴方。

大嫌い、嫌い、すき、大好き。

朝日みたいな私の事を好きになってはくれないの？

まだ7歳。昇るしかない朝日な私。

[#書き出し](#)

蘇る

不意に記憶が戻ってしまった。

俺は生まれ変わったらしい。

そうかあの時死んだのだ。

家族の顔がよぎる。

妻よすまない。忙しい時に。娘よすまない。入院中に悲しませて。

父さんはこれから、生まれる。

[#書き出し](#)

おぎゃあ。俺は生まれた。

目の前に娘の顔。まさか。

「さ、母乳を」って、NOOOOO。

雪女

急募！雪女、の広告が入ってきた。

私は不思議に思う。

急募ってことは辞めた雪女がいるのよね。

おかしいじゃない。

季節はもう夏。冷凍倉庫から出るっていうのは、雪女には命取り。

事件のにおいがする。

するんだけど、倉庫から出たなら私だって溶けちゃうから。だから。

謎解きは初雪の後で。

[#書き出し](#)

ドーナッツ

ドーナッツで首を吊って死んでしまえ！

悲しかった。けれど何より君の願いを叶えたい。

僕のサイズを考えたなら、この強度と大きさとで完成。

[#書き出し](#)

君の願いを叶えるよ。首を吊ろうとする僕を殴り、泣きながらドーナッツを食べる君。

「でかーいかたーい」

僕は何かに失敗し、そして正解したようだ。

逆転

昨日の夢、僕が女で、君は男になってたんだ。

男らしい君。俺が女々しく人間関係愚痴ったら頭を撫でて、楽しいことをしようって。

遊園地ですっごいコースターに誘われ、観覧車ではキスされた。

その後イタリアン食べて飲んで沢山笑う。

ってねえこれいつもと同じじゃない？それってそれって。

[#書き出し](#)

鏡よ鏡

鏡をのぞき込むと確かに見えるのに、振り返っても誰もいない。

誰だこのイケメン。格好いい。ねえ君はどう思う？このイケメン誰だと思う？

#書き出し

「鬱陶しい貴方でしょ？」

「え、俺？あーイケメン過ぎて自覚できなかった」

「ダイエット成功して嬉しいの解るけど、痩せただけで顔は同じだから！」

まんじゅうふかし

蒸しまんじゅうの気持ちがわかるなー。

そう言って君は腰掛けた。

僕ら、酸ヶ湯をドライブ中。

ここにあるまんじゅうふかしはまんじゅう気分を満喫できる。

「美味しそう」「おひとついかが」「食べたい」「甘党ですか」「君が、食べたい」

その赤い頬は蒸気のせいじゃないよね。

「...召し上がれ」

[#書き出し](#)

画竜点睛

画竜点睛を書く仕事をしている。

とはいえあれは昔話。

最近では竜以外の依頼も多い。

今日は綺麗な女の絵。

持ち主は女に恋してる。

さてと。この女が生きる為に必要なものは。

[#書き出し](#)

欲望を書き足す。

「これが主？えーイケメンがいいー。こうなったら、自力ゲットよ！」

女は夜の街へと消えて行った。

魔法

魔法の解ける音がした...

彼女は硝子の靴に望みをかける。

ドレスも馬車も魔法だけれど、あれだけが真実。あれだけが証。

彼女は祈る。幸せになりたい。

[#書き出し](#)

数日後靴が届く。

「危ない靴はやめた方がいいですよ」

王子は親切な男だった。

彼は近隣の姫と結婚する。

それじゃ、毒林檎でも贈りましょう。

盗まれた

こんなの、盗むほどのものでもないけどさ。
盗んだことにしないとずっと、貴方が貴方を守れないから、盗んだことにしてあげる。
貴方の頃にはグーグル先生はいなかった。
見て盗め。それが貴方の唯一の道。
アイデンティティーは尊重したい。
貴方の技を盗んだふりで、上手に模倣し料理する。

[#書き出し](#)

こんなの、盗むほどのものでもないけどさ。
だってきっと盗まなくとも君が僕にくれるから。
けれども、あえて盗みたい。そしたらやっとな価値ある物だと君が認めてくれるでしょ。
君の僕への恋心。それがどれだけ価値ある物か、君は知ってた方がいい。
僕の覚悟が決まるまで、少し高嶺の花でいて。

[#書き出し](#)

爆弾

少女は爆弾を抱えて眠る。

この爆弾で吹っ飛んじゃうのは、あなたかもしれないし、あたしかもしれない。

爆弾チチチ。

明日あなたに差し出すつもり。だから今日は優しく抱くの。

爆弾チチチ。

明日爆発したならば、壊れちゃうのは何かしら。

あなたかあたしか一人の世界か。

夢見て眠る、決戦前夜。

[#書き出し](#)

秘密クラブ

生々しいのはお嫌いですか。

いいえむしろ褒美です。

これが秘密の合い言葉。ようこそ秘密クラブへ。

[#書き出し](#)

全ての生ものが禁止された。

魚も鶏も馬も貝も。生もの全てが禁止対象。

そこで登場秘密クラブ。

お金次第で全ての生もの食べ放題。

大盛況のそれが実は政府直轄ということもまた秘密である。

白雪姫

白雪姫は薄く微笑み、両手を差し出す。
貴女の林檎食べてあげる。
生きることにも美しさにも、私は全然興味がないの。
愛の記憶のない私。小人も王子も愛せない。
貴女が殺めてくれたなら、生まれ変わって愛され直す。
母親の愛を知りたいの。
できれば貴女の子供がいいわ。
だから必ず愛してね。

[#書き出し](#)

恋心

ホルマリン漬けにされた恋心が見つかった。

大発見である。

「美しい」「完全体が残っているなんて」「2000年前半のものですね」「ということは滅びる直前の」

[#書き出し](#)

恋が滅びて何年も経つ。

感情も合理化が進み、矛盾だらけで不可解で燃費の悪い恋心は滅ぼされた。

昔は良かった。老人達は言う。

井戸の底

内緒話は、井戸の底でしましょ？

夏祭り、浴衣の君に誘われ井戸端へ。

エロいことばかり考えてほいほいついてきたのは迂闊だった。

カラカラと釣瓶が落ちる。

#書き出し

「ちゃんと数えるのよ」

お化け屋敷の井戸の底。

お盆帰りする幽霊の君の代役を務めることになった僕。

「いちま〜い」

しかも女装で。

針刺し

針さしの中には妖精が住んでいる。
彼らは針さしの中に潜み日々訓練する。
壁の向こうから突然くる針を避ける。
精神を研ぎ澄ませる。
種も仕掛けもあるわけがない。
数多の妖精達が命を散らす。
苦難をこえ、選ばれし妖精達が夢の舞台に立てるのだ。
音楽スタート！（BGM：オリーブの首飾り）

[#書き出し](#)

小指

右足小指をもぎ取ってしまえたら。

なんて幸せだろう。

つまりそれってタンスの角に小指をぶつけるあの恐怖との決別だ。

何という自由。何という解放。

痛みは少なめの人生がいい。

[#書き出し](#)

「1回タンスにぶつける痛みが1なら、もぎ取る痛みは50です」

えーと、どっちが得？考えただけで痛くて無理。

ソース

僕には恋など必要ない。僕は愛しか欲しくない。

恋はさらさら八方美人で時には辛く舌を刺す。

苦手なウスターソースのよう。

愛はねっとり僕の熱い魂に、トンカツソースのように甘く絡む。

ねえ君、やめてくれないか。

君は愛など知らないね。そんなの恋だ。

魂にウスターソースをかけるような行為だ。

[#締め](#)

ホタル

「思い出を燃やしたら、きっとホタルになるよ」
そんなこと言ってたね。
その台詞さえも全て思い出になった。
これを燃やせばホタルになって綺麗に光って飛ぶかしら。
思い出ひとつ、またひとつ。

#書き出し

涙が出た。なかぬ蛍が身を焦がす。
ないてしまう私には、思い出を、綺麗なホタルに出来なくて。

量産品の恋人

買い物かごに恋人を詰め込んで大量ゲット。

まとめ買いがお得なの。

家の冷蔵庫に恋人達を詰めて今日の分を取り出した。

「君は僕、の？太陽系だろうね」

「小 籠包青椒肉丝」

日本製も中国製もどっちもどっち。

しばらくすると、私の酒を奪って飲んで暴れて殴って眠る。

安物なんかこんなものよね。

[#書き出し](#)

扇風機

扇風機を回せば、プロペラが飛んでいく。

ドライヤーをつければ、火をふいて止まる。

「もうやだっ」

僕は知っている。彼女に宿る強い魔力が電気と相性悪いって。

だけどそんなの教えない。

落ち込む彼女を慰め続けていつかきっと。

「きゃっやだー」

それに何より、僕、ドジッ娘が好きなんだよね。

[#書き出し](#)

入道雲

青空に沸き立つ入道雲がソフトクリームみたいだって君は笑った。
一体何を言っているのか。あの大きなモクモク雲はそんな軟弱なもんじゃない。
あれは。

「竜の巣だ」

誇らしげな僕。溜息をつく君。

ラピュタは本当に、ある、のだ。君は僕の手を取った。

「バルス」

[#書き出し](#)

壊されたのは、何だったか。

被害者加害者

被害者面はやめてくれと言われたから加害者面をしてみた。

「奪ってやる。全て奪い尽くしてやる。心も体も全部あたしのものにして、
あたしなしでは息すら出来ないようにしてやる」

まくし立てる。しばしの沈黙。

彼は目を伏せて「...好きにして下さい」って。

私達の恋愛、まだまだ楽しめそうね。

[#書き出し](#)

蒸発の夏

こんなに暑いと蒸発しちゃうそう、が口癖だった母が、この夏本当に蒸発した。
父は泣いた。弟は呆然とした。私は驚かなかった。予感はしていたんだ。雪の様に美しく白い肌
。

母とよく似た私を屋敷の奥へと閉じこめる父。

「お前は守る」うちは代々女は雪女の家系。恋くらいしてから消えたいな。

[#書き出し](#)

サンタ女子

「え!?サンタさんってほんとはいないの!?!」

心底驚いた顔で言いましょう。

「そういうの疎くて」と続け、更に「今までサンタさん以外恋人にしちゃいけないと思ってた」と悲しげな顔で言いましょう。

そして一変いい笑顔。

「私、解禁です♡」

その瞬間に女子力アップ。オムライス女子に続け!

[#書き出し](#)

特効薬

浮気性の貴女へ、特効薬が御座います。

彼がさしだしたのはダイヤのリング。これで私達、永遠なのね。

#書き出し

そんな風に思っていた時代が私にもありました。

けれども愛に永遠はない。

特効薬もそろそろ効き目が切れそうね。

追加処方が必要みたい。

素敵なバックがあるんだけど、

見に行かない？

暑さ休み

暑いので店は休みにします。

怒号がとぶ。

暑いから来とるんよ。

そんなこと言われても命あっての物種ですから。

はぁお前死んどるんやないのか？

客に責められながらも「氷」と書かれた旗をしまう。

それでも商売人か！

罵られて涙する。その温度で雪女は少し縮んだ。

天然かき氷、真夏日は閉店。

[#書き出し](#)

ビー玉

半透明のビー玉に似ていると思った。

向こう側の景色はぼんやりとしか見えなくて。

それなのに、青く、赤く。ビー玉を変えただけで、世界は簡単に色を変える。

恋する気持ちに似ているのだ。

向こう側の貴方はいつも曖昧で、気の持ちようで未来は変わる。

変えたい。

転がっておちて、今、割れる。

[#書き出し](#)

名前

あの人の名前を抱いて、わたしは死ぬのだ。
あの人と結婚したのは、愛するあの娘を守るため。
女癖の悪いあの人。あの娘を狙っていたでしょう？
私、あの娘を守りたかった。
不幸せな人生からあの娘を。
あの人を誘惑して結婚して。私はまんまと不幸になった。
汚らわしいこの名前こそ、私の勲章。

[#書き出し](#)

あの人の名前を抱いて、わたしは死ぬのだ。
本望だ。あの人を守ることがわたしの使命。
スパイとしてこの国に来た時から、覚悟は出来ていた。
執拗な拷問。
主の名前を聞き出そうとする。
言うものか。意識が薄れる。
美しきかの名前。
一度も呼ぶことのなかった愛しい名前を抱きしめてわたし、は [#書き出し](#)

侍

封を剥がすと手のひらに乗るくらいの小さな侍が飛び出してきた。

侍らしからぬその様相。けれど侍だと言い張る。

じゃがじゃがじゃが。ギターなんか鳴らし始めた。

記憶が蘇る。ギター...侍？名前思い出せないけど。

「ざんねーん」

賞味期限切れのお菓子の付録は同じく賞味期限切れってことか。

[#書き出し](#)

フルーツの国

フルーツの国で初めての野菜大統領が誕生したことに気がつく者はいなかった。
フルーツじゃん。糖度も高い。名前だって。

[#書き出し](#)

フルーツトマト大統領はほくそ笑む。この日の為に品種改良を重ね甘くなった。
フルーツの方が価値がある、そんな時代終わらせてやる。
彼は野菜の国からの刺客だった。

溶ける

そのくらいの温度では溶けませんのでもっとあげてください。

焦げるのを心配して弱火過ぎた。

男の料理教室、最終日の課題はトリュフ。

先生は僕の手を手を添える。

溶けるチョコ。

甘い香りはチョコのせいだけじゃない。

ねえ先生、あなたを溶かすには、何度くらい必要ですか？

答えは甘い方がいい。

[#書き出し](#)

あやかし

あやかしを相手の商売である。

「お願いします」深々と頭を垂れるあやかし。

約束の時間を確認し、僕らは別れた。

[#書き出し](#)

「あやかし発見なう」

画像と位置情報を貼ってツイート。

次々RTされる。

「いたぞー」探しに来た人も。

あやかしは僕を見て笑った。

信じられて怖がられてなんぼの存在だものね。

コウノトリの苦悩

コウノトリに手をひかれてここまできた。

だけどいきたくない。生きるとか無理。

赤ちゃんに誕生を拒絶される。

鳥が人を説得とかって難しいし、あーもう仕方ないな。

違うもの、届ければいっか。

[#書き出し](#)

「最近、人間からコウノトリが生まれる現象が多発しており...」

プレゼントは、あ・た・し♡

影売り

影を売って暮らしております。

幽霊の嗜みでございます。

足元に影。

これで殆ど、人とは区別がつかないのでございます。

不思議なものでございますね。人は自分の影なる部分を嫌いますのに。

再び影を纏った霊達は、嬉しそうに笑うのでございます。

おや、貴方の影、少しほつれてやいませんか？

[#書き出し](#)

ほどく

星をほどいてみた。

どんどんほどけていく。気持ちいい。

やがて星をほどき終わると、続いて暗闇がほどけはじめる。

沢山の星達を巻き込みながら闇をほどいていくと、

ほつれが地球の方へ向かっているのがわかる。

あと1cm。

もうすぐ地球がほどけるというのに、

僕はこの快樂から逃れられない。

[#書き出し](#)

ヒゲセンサー

「ひげセンサーに引っ掛かったにゃ！」

「邪悪だにゃ！」「逃げるにゃ！」「どこににゃ！」「逃げられないにゃ！」

「それじゃ寝るにゃ！」「寝るにゃ！」「幸運を祈るにゃ！」

[#書き出し](#)

猫たちが眠っている。

理由は分からない、あれ、なにこの大きな影。うわああああ...

[#twCATnovel](#)

左手

左手が殺し屋を始めた。

眠っている間に仕事するようで、目覚めると手が赤い。

やめてと頼むと「私だって働きたいの」と話にならない。

[#書き出し](#)

ある夜目が覚めると左手が動いてる。

赤い。

ケチャップを自分にかける。血じゃない？

声をかけると

「右手ばかり構うから...」

僕は左手の孤独を抱きしめた。

別れ

彼は泣きながらさようならと言って笑った。

笑ったのは後ろを向いたあとだけれど鏡に映って見えてる。

私彼女でもなんでもなし、劇的なお別れじゃないのに。

結婚しようとか言ってたのだから嘘って知ってる。

[#書き出し](#)

「先生さよなら」

また一人。

神妙な顔でお別れして、ママを見た途端笑う。

園児め。

運命の乗換駅

運命の乗り換え駅に着いた。

「乗り換えますか？」

ホームには二つの列車。

一つは今まで乗ってきた列車。古いけれど愛着はある。

もう一つは新しい列車。とにかく美しい。

俺は、俺は。

[#書き出し](#)

「そこで目が覚めた」

「暗示的な夢ね。どっちにしたの？」

「そりゃ勿論綺麗、えっと愛着のある方」

「合格」

尻尾の反乱

尻尾が反乱を起こした。

後方で甘んじてきたがもう我慢ならない。

怒りのあまりぶちっと切れて、尻尾は頭に飛び乗った。

嬉しくて揺れる尻尾。

「やめてよね」

頬を連打し本体に注意される。

「垂れないで」

しょんぼりすらできないのか。

ここには居場所なんかない。尻尾をまいて逃げ出した。

[#書き出し](#)

からから

からっからの身体。

恥ずかしい。隠す衣もないというのに、今にも扉は破られそう。

私、昔は美人だったの。瑞々しい肌に流れる髪。

けれども今は。

折角隠れているというのに私のことを暴かないで。

ああ、光。

扉が、開かれた。

[#書き出し](#)

「いたぞ！」「新たなミイラだ！」

女ミイラはない頬を染める。

銀河旅行

瞼を閉じると銀河が見える。

意識を集中させ銀河の奥へ。

青い惑星を見つけたならば地を目指す。

雲を抜けると見慣れた街。

10階建てのマンションの一室をのぞくとそこには僕がいた。

瞼を閉じる僕に近寄る。そして肩にそっと手を...

[#書き出し](#)

肩に手を置かれた感触に振り向く。そこには誰もいない。

戦いが終わったら

「俺、この戦いが終わったら結婚するんだ」

「相手がいたらな」

「この前紹介したろ？」

「いや戦う相手」

「へ？」

「お前はフラグをたてた。つまり戦わずして結婚できない」

「まじか」

「敵、頑張って探せよ」

[#書き出し](#)

実はさ、本当の敵は俺なんだ。

彼女、俺とも付き合ってるの。

ま、いただきますね。

眠れぬ森の美女

眠れないわ、王子様が来てくれそうにないもの。

百年眠る呪い？そんなの知らないわ。

私、ライバルだらけなの。

毒林檎食べて賭けにでた子、声を失い捨て身のあの子、ガラスの靴で誘う子もいる。

ぐーすか眠ってらんないわ。

王子様には限りがあるの。

お酒落をしたなら茨を抜けて。

さあ、行こう。

[#書き出し](#)

32日

「今日は8月32日だ」「え？」

「8月31日宿題に追われる子らの祈りにも似た願いを聞き届け親切に新設致しました」「甘いな」

「いいのだ私は子供に甘い神なのだ」

[#書き出し](#)

「もう8月32日！宿題やってない！」「俺も！」「33日まであればいいのにね」

神は泣いた。

だから甘いって言ったのに。

はとぼっぽ

飛びたくないと鳩が駄々をこねている。

「平和の象徴、なんだそれは。俺たちや自由だ。人の為に飛ぶ義理なんか持ちじゃない」
確かにそうだ。なら仕方ない。諦めよう。

ところで豆はいらないか？欲しい？

それなら平和のために少し飛んではくれまいか。

喜んで？

君が話の分かる鳩で良かったよ。

[#書き出し](#)

蛇足

靴が欲しいと蛇にねだられた。

足がないと気づかないか。

僕は靴を買う。どうかこの靴が君を慰めますように。君に捧げる美しい靴。

見るなり蛇はとぐろを巻いた。

「履けもしない靴を贈るなんて私をバカにしてるのね」

同情は蛇足だった。

僕は責任をとって蛇と結婚することになりましたとき。

[#書き出し](#)

ヒップホップじゃ眠れない

ヒップホップじゃ眠れない。

だって私は知ってるの。これは不良の音楽よ。毎日毎日ああ五月蠅い。

今日こそハッキリ拒絶する。

[#書き出し](#)

「蹴った」

声がる。蹴り飛ばしてやったの。

不良親の元になんか生まれてやらないって抗議よ。

「パパだぞ」「ママよ」

優しい声。

生まれてなんか。生まれてなんか。

待つ

君を待つだけの簡単なお仕事。最初の頃は視界の限り。
どんどん離れて、今では目も手も届かない。
それでも待ってる。待ってるわ。

[#書き出し](#)

「母さん、ただいま」
私の好きなお菓子とお花、供えて君は手を合わす。お
盆は毎年待ってるの。
待っているけど天国にはね、まだまだゆっくりいらっしやい。

蛇

君は、双頭の蛇をその身に這わせ、艶やかに笑う。
白い頬にチロチロ蠢く赤い舌。蛇は僕を喰らうだろう。
けれど誘う君の目を、拒める者がどこにいる？

[@873k](#) [#歌話](#)

君の赤い舌が絡まる。
口付けは甘く、痺れた。君の足元に転がる僕。
ああ、君も蛇の一部か。
双頭もとい、三頭の蛇。

[#twnovel](#)

星の首飾り

君の目に口付けた理由は恋じゃない。

涙なんか溢すから。そんなことをされて眉一つ動かさない君の首飾りが光る。

星になった彼が残したそれは、君を世界へと繋ぐ唯一の楔。

この一年ずっと側にいた。ずっと君を見てた。

親友の墓の前、泣き喚く君に、僕の姿は見えなくて。

[@uryuuraita](#) [#歌話](#)

制服

階段の上であいつがあたしを呼んだ。

「はやくこいよ」

夏休みにあたし達、合宿と称して部活仲間と旅に出る。

今日は会合一回目。駆け上がる階段。跳ねるリボン。あいつの視線は。

「ねえ、何処見てるの？」

赤くなってそっぽを向いた。揺れる胸元。

ねえ私達、友達、だよな？

[@uryuuraita](#) [#歌話](#)

繋いだ手

僕らは夏休みだけの友達。

キラキラ眩しい日差しの下で、二人で一緒に遊んだね。

来年もまた遊びにくるよ、と指切って。

[@junju_usako](#) [#歌話](#)

あれから10年。浴衣姿の君がすだれ越しに見える。

隣の男は誰？なんて聞くのは野暮かな。

僕らそれぞれ大人になった。

この手は君に、届かない。

草場の陰

霊になって初めての盆。

帰る家など持たない僕は「あの世」で淋しく過ごすだろう。

長い長い「この世」への行列を見守る。

おやあれは何だ。列の先には笛と太鼓。

妙なる奏は霊を導く。

「導きは帰る場所のない連中が引き受けてくれているんだ」

僕はその祭囃子に夢中になった。

@873k #歌話 #歌話題

太陽の彼女

気づかれないようそっと。

あたしが彼が好きって事は、まだ伝えたくない。

けれど唇の誘惑に抗えない。

眠っている彼に私はそっと口付けた。

[@_urt](#) [#歌話](#) [#歌話題](#)

唇に柔らかな気配。あったかい。

昨日から仲間で飲んでて。多分その中の誰かで。

目が開かない。片想いの彼女だっ たら い zzz

すききらい

「好きなの」「好きじゃない」

「困るわ」「事実だ」

「だって私は好きだもの」「僕のどこが」

「貴方の好きな音楽や食べ物やあの子が好き」「それは僕じゃない」

「貴方の好きな物をこんなに好きなの。だから私は貴方を好きはず。貴方も私を好きになっ
てね」

[@junju_usako](#) #歌話題 #歌話

たこ焼き

僕はお前が嫌い。

可愛い君の右手を占拠するたこ焼き、お前が世界一嫌い。

「ちょっと座ろうか」「まだついてないよ？」

僕は君を座らせるとたこ焼きを奪った。

お前なんか喰ってやる。

「くださいな」

あーんと口を開ける君。

前言撤回だ。

たこ焼き、お前に感謝する。

[@ps_plum](#) #歌話 #歌話題

浴衣ガール

浴衣姿で驚かせたい。だけど自分じゃ着られない。
彼を驚かせるにはこうするしかなかった。

[@ps_plum](#) #歌話 #歌話題

「まさか飛行機から浴衣で降りてくるとはね」

「母さんの手伝いがないと着られないの」

「じゃ脱がせられないなあ」

着替えはちゃんと持ってきてるとか恥ずかしくて言えない。

天の川

天の川 願い流れた 恋心 君に拾われ ハッピーエンド [#tanka](#) [#天の川にお願い](#)

暗闇

暗闇に 貴方が星を くれたから 綺麗な夜空と なって輝く [#tanka](#)

空想の街（仕立屋）

この季節、仕立屋は忙しい。

『和装』の注文が多いのだ。

さてと夕方までには全ての注文を終わらせなくちゃ。

氷涼祭か。

私にとっては切なくて愛しくて。

おっと、いけない。昔のことを思い出しそうになって頭を振った。

考えちゃダメ。忙しさに感謝する。

もうすぐ、氷涼祭が始まる。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

この時期意外と多い注文は白いドレス。

死んだ恋人と結婚式の真似事なんて可愛らしいじゃない？

永遠の愛を誓って、満足したら、時間切れでお別れ。

その後の遠距離恋愛、耐えられるかられないかはあなた次第です、みたいな。

私は注文票を見直す。

物語が落ちてないかしら。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

やっぱりね。

こういう店に頼むお客様だもの。伝票から漂う物語の匂い。

うちは少しお高めのお店。けれどもお客様の細かな希望や欲望にお答えできちゃう店だから。

お婆ちゃんに、男の子。揃いで2枚注文。

前にウェディングドレス頼んでくれた子のお直しなんかもある。

ミステリー。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

チャイムが鳴る。老婆が一人。

「品物受け取りに参りました」ドレスのお客様だ。丹頂の羽から紡いだ糸で織られた布から作られた上品なドレス。

老婆は笑う。

「おかしいでしょ？こんなお婆ちゃんが」

いいえ、と笑いかえすけれど、知りたい。聞きたい。気になるじゃない。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

「お時間があればお茶でもいかがですか？」

私の言葉に老婆は笑う。

「恋の話でもしましょうか」

さすが熟練の女子。わかってらっしゃる。

「最高のお茶を淹れますね」

白い湯気の向こう、老婆が窓の外をそっと見てる。

人生の先輩からのお話。どんな物語が始まるのかしら。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

「私の旦那様は記憶が零れる病気だったの」ゆっくりと老婆は語り出した。

氷涼祭は毎年、帰ってくるあの人と街を歩く。

白いドレスの子達を見ると、あの人は言うの。

お前をそろそろ嫁に貰わないとなつて。

あの人の記憶は曖昧で、私との結婚前まで零れてしまった様だった。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#) [#老婆](#)

毎年毎年、あの人は言うの。

お前を嫁に貰わないと。

あの人に新しい記憶を植え付けること、不可能だって思っていたから私は最初から諦めてた。

だからその場で頷いて、ただただ笑うだけだった。

そんな風に、何年も何年も過ぎていったわ。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#) [#老婆](#)

そしたら去年の氷涼祭。

私に指輪が届いたの。勿論あの人からだった。

あの人は、自分が頼んでいたことさえも忘れてしまっていたけれど、

どうにかこうにか頑張つて、私に指輪を届けたの。

嬉しかった。とっても。

忘れられちゃうからって何もしなかった私は、自分を恥じたの。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#) [#老婆](#)

私が覚えていられるのだから、それで十分だったのよね。

それに、覚えて貰えなくとも、なかったことにはならないことに気づいたの。

そこまで一気に話すと、老婆は紅茶に口をつけた。

「あらおいしい」

微笑む老婆はまるで少女みたいに可愛らしく、なんだか嬉しくなったんだ。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#) [#老婆](#)

「だから今年はこっちからって、決意のドレスなんですか？」

問うと老婆は頷く。

「決意というか誠意かしら？」

頬が赤い。誠意なんかじゃない、これは愛だ。

「旦那様を白いドレスで迎えてそのまま結婚式！そんな素敵なことされたら死の国になんか帰れなくなりそう」

[#空想の街](#) [#仕立屋](#) [#老婆](#)

「嫌だわあなた勘違いしてる」

へ？

「あの人生きてるわよ」

「でも確か氷涼祭りに帰ってくるって」

「入院してる病院からこの日は帰されるの」

「生きてるなら氷涼祭じゃなくても」

「この日なら白いドレスの子が多いから、こんなお婆ちゃんでも少しは恥ずかしくないでしょ？」

[#空想の街](#) [#仕立屋](#) [#老婆](#)

それに貴方みたいに、あの人が死者だと勘違いしてロマンチックな空想に浸ってくれる人もいるみたいだしね。

老婆はそう続けた。

真実だって十分ロマンチックじゃないって思う気持ちと、勝手に勘違いしてしてやられたっていう気持ちが混ざって、私は変な顔をしてたと思う。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#) [#老婆](#)

「素敵なお話有り難うございます」

「それじゃ」

大切そうにドレスを抱える彼女を見送る。

あのドレスで愛する人とまた結ばれる。

相手が覚えてなくなっても彼女はきっと忘れない。

あのドレスは幸せな記憶を作るだろう。

作って欲しいな。

そうすれば私の仕事は大成功だもの。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#) [#老婆](#)

私は風船を結ばない。

来て欲しい死者なんかいないもの。
死者達が空から降りる夜。
空を見上げてしまうのが恐くて、私はひたすら仕事する。
仕事があってよかった。
氷涼祭は私の数少ない弱点の1つかもしれない。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

私の話をしようか。 [#空想の街](#) [#仕立屋](#)

昔々あるところに、私と彼氏がいました。
いいじゃない。恥ずかしいのよ。これくらいのわざとらしさ許して？
彼氏っていうより、婚約者かな。
結婚の約束をして、指輪も貰ってた。
私は自分のドレスを縫い始めていて、それは一世一代の大傑作になるはずだったの。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

今思えばなんて死亡フラグって感じよね。
けれどその頃の私はとにかく幸せで、全てのものに感謝すらしていた。
え？今から想像できない？
まーね。この物語の結末は、私の性格を多少曲げちゃうくらいの出来事ではあったってことよ。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

もったいぶっても仕方ないから簡単に言うとね、彼、死んだの。
死んじゃったのよね。
もうホント、安易な展開でごめんなさい。
あの人、お花見の待ち合わせしてた桜の木の下で死んでたのよ。
桜に死体。
風流すぎて実にあの人らしいって思ったけど、この話はおいておきましょう。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

結婚式は5月にあげるはずだったのにね。 [#空想の街](#) [#仕立屋](#)

それからの私は、きっと今からは想像できない有様だったと思う。
何かを考えるとどこか、服を仕立てることすら出来なくなってしまったの。
少しでも元気だせるようになって、私を外へ連れ出そうと頑張ってくれてる人もいたけれど。
無理だった。元気がないっていうより心がなかったの。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

そんなある日のことだった。[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

そのポスターは、饅頭屋さんに貼られてた。

きつね橋付近のそのお店。

評判のお店のような感じだったが、その時の私には味なんかわからなくて。（でも全部食べた）

氷涼祭。あんまり意識したこともなかったそのお祭り。

ポスターに私は釘付けになった。

そうだ死者が帰ってくるのだ。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

死者が帰ってくる。

それは彼が帰ってくるということ。

私はその日をが楽しみになった。

そしてね、やるべき事をやりたい。そう思ったの。

仕事を再開した。

注文はあんまり受けなかったけれど、毎日毎日、針を動かした。

そう、解るわよね。ドレスを、完成させるのよ。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

このドレスを着て、彼と会う。

それがその時の私の全てだった。

きっと、あの日の続きを、はじめられると信じていたんだ。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

なんの意地悪な出来事もなく、きちんと日々は過ぎ、祭りの日も滞りなくやってきた。

私は約束通り、家の前に風船を掲げて彼を待つ。

彼はやってきた。

なんの迷いもなく、私の家の前に着地して「久しぶり」なんてさも何ごともなかったように笑ってみせた。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

まさにあの日の続きだった。

私は完成させたドレスを纏って、彼と結婚式を挙げた。

幸せだった。日々は、あっという間に過ぎてゆく。

タイムリミットのある逢瀬が今日で最終日だということに気がつかなかったのは、

きっと気づきたくなかったからだと思う。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

白鴉がワタる。

お互いにお別れを言えないまま、手を握る。

私達、この3日間、なにひとつ未来のことを話さなかった。

お茶がおいしいねとか、あの本が面白かったとか。

貴方の死や私の孤独について何一つ話し合わずに過ごしていたの。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

風船を放せない。この手を離せない。さようならのことを話せない。

彼は困ったように笑った。私は握った手に力を込める。

「いや」小さく言う。これが精一杯。

「もう、いいよ」彼はそう言うと、私を抱きしめた。

彼の胸の中、空なんか見えない。

けれど多分。白鴉はもう、いない。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

どうなってしまうかなんてわかってた。

ううん違う。知ってただけで本当は解ってなんかいなかった。

それから数日、私は彼と暮らした。

穏やかな日々だった。

お別れを認められない私は、彼との永遠の別れを惜しもうともしなかった。

認めることが、出来なかったんだ。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

けれど、奇跡なんて起こるはずがない。

起こらないから奇跡なんだ。

ある日、二人で食事をとっていると、突然彼は消えた。

スプーンがカランと落ちる音で、目の前の彼が消えたことを知ったんだ。

彼が最後にどんな顔をしていたかすらわからないような、

そんな唐突なお別れだった。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

それからは、なんていうんだらう。廃人？

魂がない感じ。

うーん、あんまりなくなるもんでもないからわかりにくいかしら。

それでもどこかで期待してた。

来年、また逢えるんじゃないかって。
引き留められた霊は二度と帰ってこない。
知っていたけど、でも、期待しちゃうのが乙女心。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

一年が経った。あの人は、やっぱり、帰ってこなかった。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

体は動きを止められるというのに心は止められない。
彼が帰ってこなかったという現実について私は考え続けてた。
考えたって仕方がないのに。
私はどうにかしてその現実から逃れたかったんだ。
二人の関係にとどめを刺してしまったのは私だなんて、重すぎるでしょう。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

カランカラン。
ダメな人生を送っていた私だから、お客なんてほとんどこなかったのに、ある日扉は開かれた。
「「おーい」」子供の声、二つ。
「すみませーん」大人の声。顔を出すとウサギの耳が3セット。
そう、私とウサ耳宅配便親子との出会いだ。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

風船が3つふわふわしてる。
そうか、今日は氷涼祭。彼が消えてから2回目の氷涼祭。
「あのね」「浴衣」「この子達に揃いのを願ひ」この中の誰が生きていて誰が死んでいるのかしら。
なんて考えながら注文に応えていく。
もしも彼も帰ってこれたなら。そうしたら今頃。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

手が止まる。
「ちょっとあんた」ウサ耳母が私の左手に右手を重ねた。
「泣いてる！！」
ふわふわ揺れる風船。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

仕事はあんまりしていなかったけれど、客前で泣いた事なんてなかった。

こういうのってタイミング？それとも運命？

それは未だに謎だけれど、ここで泣いてしまったことは、私にはとても幸運なことだったのだと、今は思ってる。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

駆け回るウサ耳宅配便sを気にも止めず、ウサ耳母は私の話に耳を傾けた。

ま、耳っていうか補聴器なんだけど。

「へー。この時期に風船もつけてないから何か訳ありかとは思ったけどそういうことなの」
ふんふん、とウサ耳母は少し考え込んだ。そして、どういうわけか笑ったのだ。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

「いいじゃないそれくらい」「え？」

「もう、あえないだけよ」「だけ？」

意外だった。

「私、死人なのね」

更に意外な一言。

「もしも、娘達の願いを叶えて消えてしまえるのならそれはそれで幸せだけれどね」

「だけどそれじゃ」

「でもそれを気に病まれるならちょっと辛いかもなあ」

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

「普通気にします」「そう？」

「しますよ」「それじゃあなたには覚悟がなかったのね」

「覚悟？」「そ。逢えないだけで終わっちゃうような関係だったってこと」

「私は...」「あ、怒った？ごめーん。つい言いたいこと言っちゃうのよね」

「覚悟は、なかったかもしれせん」

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

「ねえ、覚悟ってなんの覚悟か解ってる？」

「彼を愛する覚悟？」

「愚かな娘よ、違うわ」

ウサ耳母は勝ち誇ったように笑っていた。

「二人で二人分以上幸せになる覚悟よ」

シャキーンって効果音がお似合いな右手を挙げたポーズでウサ耳母は宣言するようにそう言ったんだ。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

「あんた自分のことしか考えてない。彼氏の気持ちも考えてみなよ」

胸に手をあてるウサ耳母。

「あんたの願いを叶えたくてもうこっちにこれないの承知してくれたんでしょ。

大事なのはそこ。テストでるのはそこ。あんたは赤線引くところ間違ってる」

だからいい点とれないのよって。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

「でも」「でも、何？」「えーと」「あたしが正しすぎて言い返せないでしょ」

確かに言い返す言葉が見つからない。

「「勝利！」」

いつの間にか側にきていたウサ耳宅配便sが万歳をする。

調教、じゃない教育良すぎ。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

「だけどね」ウサ耳母は続けた。

「すぐに気持ちなんて変わらないでしょ？だからかくれんぼしてると思いなさい」

「かくれんぼ？」

「そう。鬼は彼。あんたが逃げる方。彼と会えないのはそのせいね」

強引な。

「強引って思ったでしょー」

このウサ耳、心の声まで聞こえちゃうのかしら。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

「「かくれんぼー」」

かくれんぼをはじめだしたらしいウサ耳宅配便s。

「っていうことでね」

私の手をとるウサ耳母。

「浴衣、可愛いのおねがーい。勿論お安くしてくれるわよねー？」

そうだった仕事。

「えー、仕事は別ですよ」

「何この子。さっきまでめそめそしてたクセにっ」

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

「サービスでもう一着大人用作ります作らせて下さい」

「やだーあんたいい子じゃなーい」

「じゃ、寸法とりますね」

こんなに仕事に前向きなのは久しぶりだった。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

祭りが終わって、ウサ耳母が帰ってからも姉妹はやって来た。

賑やかな毎日。私はなんていうの？

「落ち込んだりもするけれど私は元気です」的な？

それなりにボチボチやってた。

氷涼祭の時期には胸が痛むけれど、少しずつ薄れていったんだ。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

忘れてしまうことや終わらせてしまう事への罪悪感があるのなら抱えていればいい。

解決できないことだって世界にはあるでしょう。

終わらない問いに立ち向かい続けることは悪い事じゃない。

急がないで考え続ければいい。

私は、二人で二人以上分幸せになれる道を探してる。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

これが私の物語。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

カランカラン。扉が開いた。

「久しぶりー」「「きたのー」」

ウサ耳親子だ。

「久しぶり」「あらあら相変わらず辛気くさいわぁ」

「お祭り以外は素敵なおねーさんやってますー」「ま、仕方ないわよねー。帰る前に寄りに来たわ」

ウサ耳母はこうやって毎年、私に会いに来る。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

「なあに？風船も結ばないで。あたし歓迎されてないーい」

わかってる癖にそんなことを言って拗ねる。

ウサ耳母は私の昔話を禁忌にしない。

前に言ってたっけ。秘密にすればするほどそれは力を持ってしまうからって。

そうかもしれない。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

私はまだ、かくれんぼから逃れられない。

隠れるのが上手すぎて見つからないふりを未だ続けてる。

風船なんて目印は付けられない。

かくれんぼの邪魔になっちゃうから。

鬼がないんじゃない。彼はこないんじゃない。見つけれないだけ。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

それともうひとつ。こっそり思ってることがある。

もしも万一、彼がいつか帰るとしたら。どこかで私を見てるとしたら。

風船掲げて待ってる私を見るのはとても辛いでしょう？

それならなんでもないふりで、もう彼なんか忘れた素振りで、

少しの寂しさと大きな安心をあげたいじゃない。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

「あーんそろそろ帰らなきゃ」

風船を確認するウサ耳母。

「何これ」風船のちょうど根本あたりを見つめる。

私には何も見えない。どうやらウサ耳姉妹にも見えていない。

ウサ耳母は見えない何かをそっとつまんだ。

「ほほう」ニヤリと笑う。

「ホント、あんたの旦那性格悪いよね」

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

「実は死者の国で会ったの」驚いた。

「あいつひどい男よ。

自分が消えた事で奥さんは自分のこと一生忘れられなくなったに違いない、

なーんて喜んでるんだから。叱ってやったわよ」

私は啞然とする。けれど確かに、そういうこと言いかねない人ではあったわ。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

「それにしたってこれは。あたしに言付ければいいものを。

うっかり気づかないところだったわ」

ウサ耳母は私の左手をとった。

パントマイム？

指輪をはめているような。だけど。

「あんたの旦那からの贈り物よ」

左の薬指、見えないけれど確かに、指輪の感触。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

「あいつホント性格悪い。これじゃ忘れられなくなっちゃうじゃないってちょっとあんな。もうっ」

だって嬉しかったんだ。

「あんな、あたしの前じゃ泣いてばかりじゃない」
いつもはクールビューティーだからいいの。

「よしよし」
私、ようやく、鬼に見つけてもらえたみたい。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

「ママ！」「時間！」
ウサ耳姉妹が騒ぎ始めた。
「そーね。あたしそろそろいくわ」
姉妹を抱きしめるウサ耳母。母親の顔。
ぎゅっと泣くのを我慢するウサ耳姉妹。

「「またね」」
私なんかよりずっと大人に見える。
「来年も来て欲しい！」
「引き留めるなんてどあほだもん！」
前言撤回。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

外に出ると、空には沢山の風船。
綺麗。これ、布に出来ないかな。
ふわりと空へと舞い上がるウサ耳母。
「旦那に伝えたいこと、なんかある？」
突然の質問に私は困った。
「ねえ次は何をくれるの？って」
「了解！その子達、頼んだわよ」
その子達、は我慢しきれず泣きながら手を振る。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

「うぐうぐ」「えぐえぐ」
二人の頭を撫でる。
「今日は泊まってく？」
「し、仕方ないの」「泊まってあげるの」
はいはい。
「「着替えてくるっ！！」」

準備万端整えてきてるクセに相変わらず恩着せがましいウサ耳宅配便s。

きっとこのまま勝手にベットに入り込んで眠るだろう。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

そしてようやく。薬指の指輪に触れる。

見えないし、触れない。

ウサ耳母の演技じゃない、なんて保証はないけれど、信じる。

彼女の事を信用しているからってということもあるけれど、だって、あって欲しいじゃない？

だから、それでいいの。いいと思うんだ。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

私の罪は消えない。そして彼の罪も。

けれどそれでいいと思う。

認めて、振り返らなければ、償えない。

償いはしあわせ。

一緒にいられない私達だけれど、一緒にしあわせにはなれるはず。

だって、私が彼としたいのは恋愛で、触れ合いや依存は、一番じゃないもの。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

それにね。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

指輪、嬉しかったんだ。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#)

空想の街（仕立屋レス）

カランカラン。

ドアの音と共に声がある。お客様？顔を出す。

知らない顔に、知らない、足？

俯く女性と、その横にいるのは、お孫さんかしら？

「いらっしゃいませ。セクシーな出で立ちですね。ファッションなら、素敵ですけど…」
にっこり笑ってご挨拶。

[@x_yuuri_x](#) [#空想の街](#) [#仕立屋](#)

あらすごい。

服に仕掛けを作るなんて、この子商売敵になるんじゃない？

ま、私の敵ではないだろうけど、だろうけどっ。

お婆ちゃんは気の毒だけど、こういうの好き。

お孫さんを応援したい気持ちがつつつ湧いた。

だけどプロとして、だけれどね。

[@x_yuuri_x](#) [#空想の街](#) [#仕立屋](#)

「ここは仕立屋。少し違った直し方、しませんか？」

私は紙に絵を描く。

前短めの後ろ長め。レースをつけて足は見えない。

マーメイドドレスにニュアンスは近い。大人の女性をアピールする。

「お迎えになる方のお好みに合えば、ですけど」

私は尋ねた。

[@x_yuuri_x](#) [#空想の街](#) [#仕立屋](#)

話を聞いていると、どうやらデートの戦闘服みたいじゃない？

恋するための衣装。恋させるための衣装。

私の得意とするところ。裾に合わせて細部も調整する。

へー、風船、惑星なのね。

それじゃ、レースは星くずにして、この傘を合わせてもらおかな。

[@x_yuuri_x](#)

「できました」特急仕事、頑張った。

デートの時間、減ってしまったら困るもの。

「こちらの傘をセットでどうぞ」流れ星の流れる布で作った傘を手渡す。

「良い逢瀬を」

うん、よく似合ってる。さすが私。
これなら、どんなお爺ちゃんだってイチコロよ。

[@x_yuuri_x](#) [#仕立屋](#) [#空想の街](#)

私は請求書を差しだした。

「今は払わないで下さい。今日のデートのお相手の反応聞かせて欲しいんです」
だからその時お支払い下さい。

「楽しみにしてます」

戸惑うお婆ちゃん。お辞儀する孫。

話したくてたまらなくなるような素敵な物語が生まれますように。

[@x_yuuri_x](#) [#空想の街](#) [#仕立屋](#)

カランカラン。音がした。「はい」今日は仕事に没頭したい。

お客様なら生きてても死んでても、大歓迎。

[@asimox330](#) [#空想の街](#) [#オトトイ食堂](#) [#仕立屋](#)

承りました。

私は考える。

碧の映える色。碧はなかなか難しい色だ。

青に近いか緑に近いか。

はっきりしないなら同系色より、碧がかった白から銀の布地が良さそう。

確かあったのよね。草の露から紡いだ糸で織りあげた布が。

[@asimox330](#) [#空想の街](#) [#仕立屋](#) [#オトトイ食堂](#)

そうこれ。このふわふわの布を曖昧なラインで裁断して、ゆるく縫い上げる。

背中はおもいっきり開けましょうね。

この布は時々昔を思い出してしっとり露を抱くけれど、それはの思い出。

だから気にしなくていい。濡れはしないわ。

[@asimox330](#) [#空想の街](#) [#仕立屋](#) [#オトトイ食堂](#)

「お待たせ致しました」

さあ、できあがり。

可憐だわ。って自分で言うのもなんだけれども。

こういう女の子の子なお洋服はたまらないわね。

自分が適齢期越えだから？うーん、平たく言うとそうかもだけれど、それは言わない約束なのよ。

[@asimox330](#) [#空想の街](#) [#仕立屋](#) [#オトトイ食堂](#)

お客様のご注文、ですね。サイズを頂きます。
思うままに。それはとても難しいご注文ですね。
お洋服のことじゃなくとも構いません。
お客様のこと、少しお話して頂けませんか？
私は、良い服しか作りたくないのです。

[@asimox330 #空想の街 #仕立屋 #オトトイ食堂](#)

つまりこれは、勝負服。
私の大好きなジャンルだ。
しかも色恋の勝負服だなんて、最高じゃない。
「それは、是非勝ちましょう」
さあどうしよう。この羽を隠すなんて勿体ないことは出来ないわ。
やっぱり背中を開けるべきよ。

[@asimox330 #空想の街 #仕立屋 #オトトイ食堂](#)

けれど相手を打ち負かすだけじゃダメなんだろう。
だってその人、ふらっと来るような人だもの。
詳しいことは解らないけれど、この素敵なおひよ姉さんに、なんらかの愛があるはずなのよ。
ってことは、赤じゃだめ。決まった。

[@asimox330 #空想の街 #仕立屋 #オトトイ食堂](#)

この人面白い。どういうつもりなんだろう。
だけどそんなの関係ない。私は誠実に依頼に相応しいドレスを作る。
「私が瑠璃羽の子に作ったドレスはきっとその子を幸せにします。
そして今から貴方に作るドレスはきっと貴方を幸せにします。」

[@asimox330 #空想の街 #仕立屋 #オトトイ食堂](#)

「貴方の幸せと瑠璃羽の子の幸せ。それが並び立つものかは私は存じませんが、
きっと、丁度いい幸せに辿り着くはずですよ」
わかんないけどわかるのよ。だってこの人、覚悟の出来てる人に見えるもの。

[@asimox330 #空想の街 #仕立屋 #オトトイ食堂](#)

私は桜色の布を手取る。
白に近い桜色だ。桜が散っていく様を、すっかり閉じこめたその布は、
ピンク色なのに、大人の色気を感じられる。
優しく、艶めかしくて、賢い。大きく開けた背中、肩。同じ桜色のショールを作る。

[@asimox330](#) [#空想の街](#) [#仕立屋](#) [#オトトイ食堂](#)

「私は幸せをすることで幸せになれたらと思ってます」
思っはいるのよ思っは。

やっぱりこの人面白いな。納得は全然出来ないけれど。

「二着。完成です」

二人分の服を渡す。

ねえドレス、このすれた姐さんを、ちゃんと癒すのよ。

[@asimox330](#) [#空想の街](#) [#仕立屋](#) [#オトトイ食堂](#)

「承りましたご住所をこちらに」凄味のあるお客様だった。

さっきの言葉も胸に刺さってる。

「適齢なんてのは数字じゃなくて、やりたくないの言い訳」って。

どうして解っちゃったんだらう。

私、恋愛する気なんか全くないのよ。

[@asimox330](#) [#空想の街](#) [#仕立屋](#) [#オトトイ食堂](#)

姐さんを見送ってそのまま私は街へ出た。

時計塔広場、繁る桜を見上げ通り過ぎる。

きつね橋を通り過ぎて、いつかきたうどん屋さんを過ぎると、能登洲駅。

それを越えるとオトトイ食堂だ。

こんなに歩くの久しぶり。

「ご免下さい」

いるかしら。

[@asimox330](#) [#空想の街](#) [#仕立屋](#) [#オトトイ食堂](#)

依頼のメールだ。「材料をお持ち込みして頂ければ可能です」っと。

あの桜、綺麗よね。さぞかし素敵な反物になるはず。

[@_kumoyuki_](#) [#空想の街](#) [#夏桜](#) [#仕立屋](#)

今度は私がお客様。

座って店内を見渡す。中央区ではあまりみない造り。

「急いで戻らなければならないので何か飲み物頂けますか？」

今日、外に長いこといるのは精神上よくない。

折角の素敵なお店だ。また今度ゆっくりこよう。

[@asimox330](#) [#空想の街](#) [#仕立屋](#) [#オトトイ食堂](#)

「今日私、かくれんぼしてるんです。なかなか私は見つからない。
けれど、それは私が隠れるのが上手いわけじゃなくて、本当は鬼がないから。
けれど私は信じたいの鬼がいるって」
強く信じられるお酒を下さい。

[@asimox330](#) [#空想の街](#) [#仕立屋](#) [#オトトイ食堂](#)

いただきます。日本酒って好き。
今度、肴と共に愛でにこよう。

「ご馳走様でした」お代をおいて扉をでる。
さあかくれんぼを続けよう。それにしても、鬼がいるって信じたいなんて、私、本当に思っているの？
鬼はあなた。私は。

[@asimox330](#) [#空想の街](#) [#仕立屋](#) [#オトトイ食堂](#)

カランカラン。お客様？

「あら、昨日の」物語の結末が、届いたみたい。

[@x_yuuri_x](#) [#空想の街](#) [#仕立屋](#)

「そう、それは良かった」誰かの幸せは、私を安心させる。
恋愛っていうのは、素敵なものなんだよって、もっとたくさん思いたい。
「ねえ、それじゃ、次はお孫ちゃんの番よね？来年注文を楽しみにしているわ。
恋が叶う服、なーんてものも承りますよ？」

[@x_yuuri_x](#) [#仕立屋](#) [#空想の街](#)

(承りました。あ、2枚必要になりましたらいつでもご連絡下さい)

私はそうやって、うろたえる孫ちゃんを指さす。

こんな時代が私にもあったわ。

あ　っ　た　の　！

[@x_yuuri_x](#) [#空想の街](#) [#仕立屋](#)

「いえいえー」上客ゲットですから。

「一緒に住まれるんですね。楽しくなりそう。ご注文じゃなくともいつでもいらして下さい」

もう見えない孫ちゃんと、丁寧に辞儀をして去っていくお婆ちゃんに手を振る。

来年も、楽しみね。

[@x_yuuri_x](#) [#空想の街](#) [#仕立屋](#)

空想の街（にゃん娘）

あたし、猫。みんなの、猫。
野良猫？違うわ。おひとり猫。
誰かのものにならないかわり、誰のものでもあるんだわ。
あたし、猫。気高い白猫。
好きな名前でも呼んでもいいわ。
けれど、返事をするかどうかは、あたしひとりできめること。

[#空想の街](#) [#にゃん娘](#)

黒い、猫。
あなたは誰の猫かしら。
誰かのものってどういう気持ち？
ふわふわ？ごわごわ？こんがり？
あたしの知らないその気持ち。
違う屋根から、あなたを見てる。
気がつかないで。近寄らないで。
あたしとあなた、黒と白。
並ぶと可愛くないんだもん。

[@ce1039](#) [#空想の街](#) [#黒猫](#) [#にゃん娘](#)

妖しい。近づいちゃいけない気がする。
毛が逆立つ。ヒゲがとがる。
この街であたし、色んな人を見てきた。
だけどあの人、危険な匂い。
あの人のお後ろ、沢山の透明な、人や物が見えてる。
うどん屋の場所？
後ろからついてきてるあの人達に聞けばすぐにゃのに。

[@873k](#) [#空想の街](#) [#にゃん娘](#) [#怪談屋](#)

あの人。またあの人。
妖しい。それは同じだけれど。
おかしい。だって、生きてない。
どうしたの？
後ろについてた透明な人達も消えちゃって。
どうしたの？
あなたもあたしと同じ、おひとりさまになったのかしら。

風船で降りてくる。

でもやっぱり妖しい。

[@873k #空想の街 #怪談屋 #にゃん娘](#)

あの人。まさかのあの人。

なんでどうして声をするの。

あの人ひとり。あたしもひとり。

あたしがおひとり猫なのは、あたしがきっと、可愛く賢い猫だから。

[@873k #空想の街 #怪談屋 #にゃん娘](#)

そう思ってたの。ずっとね。ずっと。

だけどね。ううん、なんでもないわ。

あの方は、もうすぐいなくなるのね。

良かった。ひとり猫の理由を、考えようとすると、毛が逆立つの。

怖い人。

ひとりぼっちの理由を解き明かそうと。

ひとりぼっち？

ううんひとり猫。

ひとりぼっち？

ねえ、あたし、どうしてひとりなの？

[@873k #空想の街 #怪談屋 #にゃん娘](#)

あたし、どうして、見てるだけなの？

あたし、どうして、撫でられたり、しないの？

あたし、猫。あたしは、猫。白い、白い。そう、まるで、銀氷のような。白い、白い。

ね、あたし、どうしてあの方の後ろ、透明な人や物を、見ることが出来たのかしら。

[@873k #空想の街 #怪談屋 #にゃん娘](#)

あたしは、頷いた。

あなたが、秘密を、そらへ抱えて、飛んで行って？

あたしは、あなたの、思い出になってあげるわ。

[@873k #空想の街 #怪談屋 #にゃん娘](#)

あの人。妖しいあの方の手。

あたしに、風船を渡す。

ふわり。空へ。舞い上がる風船。いくつもいくつも。

ああ、美しい。

あたしは、きっと、忘れない。

[@873k #空想の街 #怪談屋 #にゃん娘](#)

いっちゃった。

こんなこと、前にも。

あたし、記憶を辿る。

あたし、猫。本当に？

あたし、猫、のカタチ。

前にも誰かを、こうして見送ったの。

あたしは、猫。

あたしは、猫？

[@873k #空想の街 #怪談屋 #にゃん娘](#)

あたし、猫。

だけど、猫じゃない。

ピピピ。

思い出した。

あたし、想い出。

みんなの想い出。

ピピピ。

あたしは、作られた。

見送るために。

あの人をじゃない。

違う誰かを、見送るために。

ピピピ。

あたし、機械。

想い出を、閉じこめる、機械なの。

[@873k #空想の街 #怪談屋 #にゃん娘](#)

あの人、約束してくれた。

秘密は、持ってく。

だからね、思い出したけれど、大丈夫。

あたし、猫。

あたしはまた、来年、ここで、寂しい誰かを迎えて、帰す。

あたし、猫。みんなの、猫。

野良猫？違うわ。おひとり猫。

ひとりでいるのは、みんなのため。

[@873k](#) [#空想の街](#) [#怪談屋](#) [#にゃん娘](#)

空に風船。あたしは、ひとり。ひとり猫。

さみしい？ううん、さみしくないわ。

だって、あたし、誰かの大事な思い出を、たくさん知って、いるのだから。

にゃあ。

[#空想の街](#) [#にゃん娘](#)

空想の街（ウサギ宅配便）

「「きたの！」」

ドアをいきなりバターンと開けるのは。
顔なんか見なくてもわかる。うさぎ宅配便s。

この祭り時期、うさぎ宅配便はお休み。

今日の彼女たちはお客様だ。

お揃いの浴衣を注文している。

「一番素敵で」「一番かわいいの」「「できた？」」

はいはい。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#) [#宅配便](#)

トルソーに着せた浴衣を見つめる。

「「やるじゃん！」」

どうやらお気に召したみたい。

二人はいつも色違いの浴衣を注文する。

今年は、花火の布を使った。

浴衣の中、花火があがり続けてる。

「「ありがとっ」」

風と共に去る。

いつもより急いでる。そりゃそうよね。

[#空想の街](#) [#仕立屋](#) [#宅配便](#)

息を切らせるうさぎ宅配便s。

「「はやく...風船...」」

家の前にうさぎのカタチの風船を結ぶ。

「よかった」「間に合った」

いい子にしないとママは帰ってきてくれない。

氷涼祭は我々にとってママと過ごせる唯一の日々。

「「はやく寝なきゃ！」」

明日の朝、ママにあえる。

[#空想の街](#) [#宅配便](#)

お味噌汁の匂いがする。卵焼きの匂いもする。

トントントン。朝の音がする。

ぴくぴく動くウサ耳。

お布団の中、二人は同時に目を覚ます。

((きてる!))

ガバッ。

「ママ」「ママ」

「「ママッ!!」」

台所の母うさぎ、否、ウサ耳補聴器装着の母親に我々は、力一杯飛びつく。

[#空想の街](#) [#宅配便](#)

「うるっさーい」

ママは相変わらずだ。

「「ママあのね」」

「もう身長100センチごえ!」「彼氏がなんと15人目に!」

「靴も小さくて」「もう一人に言い寄られてて」

「「新しくしようかなって!」」

ニコニコしてうんうん頷くママ。

ママ、補聴器切ってるな。タイミングずれてる。

[#空想の街](#) [#宅配便](#)

((3人でご飯食べてると、いつもこんなだった気がする。

嬉しい。でも嬉しいって言えない。そしたらいつもは嬉しくないみたいだし、そしたらママが困るかもだし。

困らなかったらそしたら我々が困るかもだし。言えない。))

仕立屋の店長が見たなら驚くくらいの静かな食事。

[#空想の街](#) [#宅配便](#)

なんでもない特別な時間が過ぎていく。

[#空想の街](#) [#宅配便](#)

「きた!」「ふってきた!」「「氷!」」

我々は、空に向かって大きく口を開けて駆け回る。

子供だから。

「なんでっ」「落ちてこないのっ」

不思議。不思議発見。

ママがニヤニヤと見てる。

嬉しい。キラキラが?

嬉しい。わかんないけど。

嬉しい。なんでもいいの。

嬉しい。嬉しい。

[#空想の街](#) [#宅配便](#)

空想の街（ウサギ宅配便レス）

「「猫さんっ」」「可愛い」「我々の次くらいに」
黒猫のまわりをぐるぐる回る。

「触りたい」「時間が」
ぐるぐる回って、ぴたり止まった。

「「触るっ」」ガシガシ。
「ありがと」「これあげる」
黒猫の尻尾に花火模様の風船を、ぐるぐる巻いて走り去る。

[@ce1039](#) [#空想の街](#) [#宅配便](#) [#黒猫](#)